

走近日本丛书

鑑賞

(作品篇)

日本 近现代文学

● 劉振生 / 编著

 吉林大学出版社



责任编辑 / 邵宇彤



ISBN 978-7-5601-3819-0



9 787560 138190 >

定价：30.00 元

走·近·日·本·丛·书

鑑賞
日本近
现代文学

(作品篇)

◎ 吉林大学出版社

● 劉振生 / 编著

图书在版编目(CIP)数据

鉴赏日本近现代文学.作品篇/刘振生编著.—长春:
吉林大学出版社,2008.8

(走近日本丛书)

ISBN 978-7-5601-3819-0

I.鉴… II.刘… III.①近代文学—文学评论—日本
②现代文学—文学评论—日本 IV.I313

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2008)第 118697 号

书 名: 走近日本丛书
 鉴赏日本近现代文学 作品篇
作 者: 刘振生 编著

责任编辑、责任校对: 邵宇彤
吉林大学出版社出版、发行
开本: 787×1092 毫米 1/16
印张: 18 字数: 293 千字
ISBN 978-7-5601-3819-0

封面设计:张沐沉
吉林省金山印务有限公司 印刷
2008 年 7 月 第 1 版
2008 年 7 月 第 1 次印刷
定价: 30.00 元

版权所有 翻印必究
社址: 长春市明德路 421 号 邮编: 130021
发行部电话: 0431-88499826
网址: <http://www.jlup.com.cn>
E-mail: jlup@mail.jlu.edu.cn

前書

日本近現代文学（作品篇）は日本古代、中世、近世に対して言うものである。時間区画においては、1852年ペリー来航・1868年明治維新を始点として、1964年東京オリンピック・1989年昭和期の暮れを終点とした前後凡そ120年ほどの時期を指す。年号順から言えば、明治期（1868～1912）、大正期（1912～1926）、昭和期（1926～1989）という流れである。本書はこの年号順にて編集したものである。

日本近現代文学は萌芽、成長、開花、実りという移り変わりを考えてみれば、この120年ほどの日本社会における政治、経済、文化などの激動に深くかかわったかと言えよう。日本近現代文学作品と言えば、小説を始め、評論、詩歌、劇なども存在するが、本書では主に小説を取り入れている。また、小説は、長篇、中篇、短篇に分かれるが、主に中・短篇を選んだ。そして、小説界にも他の芸術界と同じく、数多くの流派に分かれているが、編集上の字数や読者の制限で、主要な文学流派、代表的作家と有名な作品だけを収録した。

本書の特色の一つは、素材が幅広く、昔から読まれてきた伝統的な作品もあるし、最近人気の高い新作もあることである。もう一つは、作品についての評論（中国語）が付いていることである。また、中国語訳や研究などの資料、情報も付録していて、読者の勉強や研究には便利だと思う。

本書は主に四年制大学日本語科の三・四年生、或いは日本語専門学校の上級生に向けて編集したものであるが、日本語がある程度に達し

た、人文社会科学に携わっている一般の社会人も十分に利用出来る。

本書の編集において、日本側谷山茂ら『新修国語総覧』（京都書房）、安藤宏ら『新編 国語』（ⅠⅡⅢ 筑摩書房）、『現代文』（第一学習社）、中国側于榮勝『日本現代文学選読』（北京大学出版社）、譚晶華『日本近現代文学名作選』（上海外語教育出版社）などを多く参照して、あわせて敬意・謝意を表したい。

目 次

前書	1
日本近現代文学の点描	編著者 1
1. たけくらべ	樋口一葉 8
2. 家	島崎藤村 16
3. 三四郎	夏目漱石 36
4. 舞姫	森鷗外 53
5. 刺青	谷崎潤一郎 80
6. 城之崎にて	志賀直哉 91
7. 鼻	芥川龍之介 101
8. 伊豆の踊り子	川端康成 114
9. 山椒魚	井伏鱒二 133
10. 美神	三島由紀夫 143
11. 富岳百景	太宰治 152
12. 山月記	中島敦 168
13. 野火	大岡昇平 180
14. 螢の墓	野坂昭如 199
15. 鳥	大江健三郎 221
16. ノルウェイの森	村上春樹 241
付録1. 主要参考文献	266
付録2. 日本近現代文学年表	268
後書	283

日本近現代文学の点描

一、近現代文学における背景

1. 資本主義の発展

慶応三年十月（1867年11月）將軍徳川慶喜の大政奉還から、同年十二月明治天皇の王政復古宣言、翌四年江戸幕府の倒壊を経て、明治新政権成立に至る一連の統一国家形成への政治改革過程を「明治維新」という。幕藩体制崩壊後の明治政府は、身分制度の廃止・廃藩置県・新学制の発



鹿鳴館内社交ダンスの風景

布・太陽暦の採用など、新体制の確立を急いだ。そして、それまでの長い鎖国政策による立ち遅れを取り戻すために「文明開化」「殖産興業」「富国強兵」をモットーとして、急速な国力の充実を図った。その結果資本主義産業と近代的な社会構造は目覚ましい発展を遂げるに至った。また、日清甲午戦争（1894～95）日露戦争（1904～05）の勝利もあり、日本は国際的にも確固とした地位を築くこととなって、欧米列強の列に入っていた。しかし、このような物質面の近代化に対し、精神面の近代化は立ち遅れることとなった。それは次第に専制化した明治政府が市民の台頭を抑え、天皇中心の国家主義を鼓吹し、封建道徳の温存に努めたからである。そんな社会では個人主義的な思想さえ危険

視された。そのため、明治期知識人たちは近代的な自我の目覚めと社会の軋轢に苦悩せざるを得なかった。明治維新からの約二十年間は、近世から近代への過渡期といえ、文学の世界でも啓蒙的なものが目立ち、文学的価値のあるものはあまり見られない。しかし封建制を脱し、新時代を希求する気運の中で、人間尊重・個性開花の芽は特に青年の間で直実に育っていった。

2. 大正デモクラシーと昭和期の軍国主義



関東大震災の当時

大正期に入ると、第一次世界大戦による経済的繁栄を背景にデモクラシーが発達し、政党内閣の樹立、普通選挙法の公布が行われた。一方では労働者・農民などの生活が圧迫され、労働運動が台頭してくるようになった。

第一次大戦後の不況や関東大震災（1923）により、昭和期に入ると、とりわけ1929年以降、世界的金融恐慌が始まり、日本も多くの資本主義国家と同じく、経済が倒

壊し、社会不安も深刻化する。政治面ではファッショ的な軍国主義化が進み、中日戦争から太平洋戦争へと突入していく。戦争は敗北に終わり、アメリカの軍事占領により、天皇の人間宣言や戦争放棄を掲げた新憲法の制定（一、主権は国民にある；二、基本的人権を尊重する；三、永久に戦争を止め、戦力は持たない）、教育制度の改革など、政府は民主国家を目指す国作りに着手した。アジア及び太平洋戦争で、破壊的な打撃を受けた日本経済は、その後、朝鮮戦争を契機に立ち直りを見せ、積極的な財政・金融政策に支えられて、経済大国と呼ばれる工業国に成長したが、現在はその歪みを是正する時期にき、政治的大

国にも企図するが、軍国主義への認識と反省は日本がこれからも先に選ばざるを得ない課題である。

二、明治期の文学

◆近現代文学の萌芽——浪漫主義・自然主義

封建体制の打破、文明開化に伴い、文学においても、新時代の気風が期待されたが、当初は、仮名垣魯文、外山正一を始めとする江戸末期の戯作文学や伝統的な詩歌の流れを汲む過渡期的な作品しか見られなかった。しかし、明治十年代（1877）になると、西洋文学の翻訳や民権運動と呼応した政治小説の流行を背景に西洋の詩を模範にして新しい詩の形式を求めようとする新体詩の運動や、旧文学観を排除して世態・人情の写実を説く『小説神髓』の坪内逍遙らの写実主義の提唱、二葉亭四迷・山田美妙らの「言文一致」の実践など、新しい文学の動きが見られた。

明治二十年代（1887）になると、森鷗外の影響による浪漫主義と極端な欧化主義への反省に立つ尾崎紅葉や幸田露伴らの擬古典主義の運動が同じ頃に起こってくる。続いて、封建道徳から人間性の解放を求める浪漫主義の風潮が高揚し、浪漫詩が全盛となり、北村透谷・島崎藤村らや、与謝野鉄幹・晶子らが雑誌を創刊して、活躍する。短歌・俳句の世界にも革新的な時代の影響が現れ、正岡子規が写生説を唱え、万葉調の新風が樹立される。また、明治二十年代後



『小説神髓』表紙

半には、日清戦争後の半封建的な社会の矛盾を指摘する悲惨小説・観念小説・深刻小説も現れた。樋口一葉の作品は明治の女性の生活記録として価値が高かった。

日露戦争後は、資本主義の急激な発展に伴って生じた社会矛盾を直



島崎藤村

視する中で、近代科学精神と結びついたフランスの自然主義運動が日本にも及んだ。しかし、赤裸々な自我の告白を通して、人生の真実を描こうとする、独自の自然主義文学運動となり、島崎藤村の「破戒」、田山花袋の「蒲団」が発表された。この時期、文語詩の伝統を破る口語自由詩も盛んになり、日常の生活を歌う石川啄木らの歌人たちの出現、自由律俳句の萌芽などを齎した。

三、大正期の文学

◆個性の尊重、現実の凝視—白樺派・新現実主義

大正期の文学は、明治末期に現れた、精神性を重んじる反自然主義の立場を取る人々によって展開された。まず、西洋文化の教養を踏まえ、倫理的で知性的な個人主義文学に徹した『三四郎』『心』の夏目漱石、『高瀬舟』の森鷗外がおり、ともすれば本能を描こうとする自然主義に飽き足りない若い世代へ大きな影響を与えた。



夏目漱石

自然主義が人生の暗黒面を描きすぎることに、満足しない人々の中からは、感覚や感情の自由な流動化を求め、芸術至上主義の立場で刺激と享楽の中に自我の解決を求めようとする『アメリカ物語』の永井荷風、『刺青』の谷崎潤一郎らの耽美派の運動が起こった。一方には、第一次大戦後のデモクラシーの思潮の影響を受けて、個人的な自我と人間性の肯定を主張する人道主義の立場に立ち、雑誌『白樺』によって、活躍した武者小路実篤・有島武郎らの白樺派の運動がある。彼等

は理想主義的な傾向を近づけ、平易な口語で歌おうとする、「道程」の高村光太郎らの口語自由詩運動がある。



中国にいた芥川

やがて、第一次大戦後社会情勢が変化し、労働運動の発生などによって、白樺派の現実遊離が指摘されるようになると、雑誌「新思潮」により現実を凝視し、その中にある人間性や人間心理を理知的に分析しようとする『藤十郎の恋』の菊池寛、『羅生門』『鼻』の芥川龍之介を中心とした新現実主義の文学が起こった。

大正時代の文学は、デモクラシーを背景にしなが、個性の尊重と自由の開化をその根本精神とした点が特色であり、とくに小説においては、志賀直哉らによって、『暗夜行路』を始めとした私小説が自然主義的私小説とは違った形で広まったことに特徴がある。

四、昭和期の文学

1. 伝統の打破—プロレタリア文学・新感覚派

大正十二年（1923）の関東大震災を契機として、昭和期に入ると、既成文学を乗り越えようとする新興文学が台頭する。その一つ、『蟹工船』の小林多喜二、『海に生きる人々』の葉山嘉樹等のプロレタリア文学は、第一次大戦後の社会不安に伴う労働者と資本家の対立の影響を受けて、労働者の生き方をリアリズムによって表現しようとした。しかし、観念的な「民衆」と「現実」との落差や、政治の意識の違いによる分裂や官憲の弾圧によって崩した。これに対抗して、知的な感



川端康成の作品

覚表現で文体の革新を目指し、伝統文学の否定を試みる、新感覚派を中心とする新興芸術運動が起こり、横光利一・川端康成らが活躍するが、表現形式の尊重による人間性の喪失によって、言論統制が厳しくなり、アジア覇権を制しようとする侵略戦争の国策への順応が強制され、島木健作、林房雄らの転向により、国策文学の時代が訪れる。

2. 戦後の文学—新戯作派・第三新人



大江健三郎の作品

太平洋戦争が終わって、言論・出版の自由が復活すると、雑誌「近代文学」によって、戦後派作家が、宮本百合子らの主宰した雑誌「新日本文学」によって、民主主義文学の人たちが活躍し、さらに坂口安吾等の新戯作派によって反俗精神が示され、戦後の混乱した世相は、風俗小説として描き出された。昭和三十年代（1955）以後は、大江健三郎、安部公房等の「第三の新人」たちの登場や、ジャーナリズムの巨大化に伴う中間小説の出現によって、多くの読者を得た。その後豊かで複

雑な社会における自己の存在意味を問う井上靖、瀬戸内晴美、古井由吉等の「内向世代」の人たち、さらには戦後生まれの作家も登場して、文学はますます多様化していく。

五、平成前期の文学

◆当代文学の虚無像

二十世紀末から二十一世紀にかけて、文学は多様化を追求する一方、個性に富む、伝統的手法に拘らずに自由に創作することが注目される。コンピュータ技術の普及および他の技術の発達により、文学を始めとする従来の芸術表現が無秩序で変種しやすい。映画、音楽、ダンスな

どの芸術の元素を活化し、伝統的文学から離れている（文学であるか）新ジャンルのものが頻りに登場する。一方「人造美人」の星新一、「ノルウェーの森」の村上春樹、「透明に近いブルー」の村上龍等は世紀の交差点に立ち活躍する。



アメリカにいた村上春樹

文学という多くの物がインスタント
 飲食品と同じく見なされ、思想、認識の早熟化、浅薄化へ導かれている。また、政治の無力感、無信頼感、歴史認識における希薄化、右翼化が社会の妄動、不安を引き招き、国民の盲従意識、緩怠意識も文学に表れてくる。文学の社会的効用が日増しに弱ってゆき、虚無の像を見せる。

1. たけくらべ

樋口一葉

信如がいつも田町へ通ふとき、通らでも事は済めども、いはば近道の土手手前^①に、かりそめの格子門^②、のぞけば鞍馬の石灯籠^③に、萩の袖垣^④しをらしう見えて、縁先に巻きたる簾のさまも懐かしう、中ガラスの障子^⑤のうちには、今様の按察の後室^⑥が珠数をつまぐつて、冠つ切りの若紫^⑦も立ち出づるやと思はるる、そのひと構へが大黒屋の寮なり。

昨日も今日も時雨の空に、田町の姉より頼みの長胴着^⑧ができたれば、少しも早う重ねさせたき親心、「ご苦労でも学校前のちよつとの間に、持つていつてくれまいか、さだめて花も待つてるようほかに。」と母親よりの言ひつけを、何も嫌とは言ひ切れぬおとなしさに、ただ、「はいはい。」と小包みを抱へて、鼠小倉^⑨の緒のすがりし朴木歯の下駄^⑩ひたひたと、信如は雨傘さしかざして出でぬ。

お歯ぐる溝^⑪の角より曲がりて、いつも行くなる細道をたどれば、運悪う大黒屋の前まで来しとき、さつと吹く風、大黒傘^⑫の上をつかみて、宙へ引き上げるかと疑ふばかり激しく吹けば、これはならぬと

- ① 土手手前：日本堤の手前の道。
- ② かりそめの格子門：簡単な作りの格子門。
- ③ 鞍馬の石灯籠：京都の鞍馬産の石で造った灯籠。
- ④ 萩の袖垣：萩の枝で作り、建物から庭のほうへ突き出た垣。
- ⑤ 中ガラスの障子：中央に明かりとりのガラスをはめた障子。
- ⑥ 按察の後室：『源氏物語』若紫の巻に出てくる按察大納言未亡人。
- ⑦ 冠つ切りの若紫：『源氏物語』の女主人公。おかづばにした幼い紫の上。
- ⑧ 長胴着：着物と襦袢の間に着る防寒用の下着。
- ⑨ 鼠小倉：ねずみ色の小倉名産の木綿織物。
- ⑩ 朴木歯の下駄：ほおの木で歯を厚く作った下駄。
- ⑪ お歯ぐる溝：吉原遊郭の周囲にめぐらされていた堀の俗称。
- ⑫ 大黒傘：厚い和紙で太い骨竹を使った傘。番傘。

力足を踏みこたゆる途端、さのみに思はざりし前鼻緒のずるずると抜けて、傘よりもこれこそ一の大事になりぬ。

信如困りて舌打ちはすれども、今さら何と法のなければ、大黒屋の門に傘を寄せかけ、降る雨を庇に厭ふて鼻緒を繕ふに、常々し慣れぬお坊さまの、これはいかなこと、心ばかりは焦れども、なんとしてもうまくはすげることのならぬ口惜しさ。おれて、おれて、袂の中から記事文^①の下書きしておいた大半紙をつかみ出し、ずんずんと裂きてこよりをよるに、意地悪の嵐またもや落としきて、立てかけし傘のころころと転がり出づるを、「いままいしいやつめ。」と腹立たしげに言ひて、取り止めんと手を伸ばすに、膝へ乗せておきし小包、意気地もなく落ちて、風呂敷は泥に、我が着る物の袂までを汚しぬ。

見るに気の毒なるは雨の中の傘なし、途中に鼻緒を踏み切りたるばかりはなし。美登利は障子の中ながらガラス越しに遠く眺めて、「あれ、たれか鼻緒を切つた人がある。母さん、切れをやつてもようござんすか。」と尋ねて、針箱の引き出しから友仙ちりめん^②の切れ端をつかみ出し、庭下駄履くももどかしきやうに、はせ出でて縁先の洋傘さすより早く、庭石の上を伝ふて、急ぎ足に來たりぬ。

それと見るより美登利の顔は赤うなりて、どのやうの大事にでも遭ひしやうに、胸の動悸の早く打つを、人の見るかと背後の見られて、恐る恐る門のそばへ寄れば、信如もふつと振り返りて、これも無言に脇を流る冷や汗、はだしになりて逃げ出したき思ひなり。

ここは大黒屋のと思ふときより、信如はものの恐ろしく、左右を見ずしてひた歩みにせしなれども、あやにくの雨、あやにくの風、鼻緒をさへに踏み切りて、詮なき門下にこよりをよる心地、憂きことさまさまにどうも堪へられぬ思ひのありしに、飛び石の足音は背より冷や水をかけられるがごとく、顧みねどもその人と思ふに、わなわなと慄へて顔の色も変はるべく、後ろ向きになりて、なほも鼻緒に心を尽く

① 記事文：ここでは、手紙文に対する普通の作文。

② 友仙ちりめん：多彩な絵模様を染め出した絹織物の一種。

すと見せながら、半ばは夢中に、この下駄いつまでかかりても履けるやうにはならんともせざりき。

庭なる美登利はさしのぞいて、「ええ不器用な、あんな手つきしてどうなるものぞ。こよりは婆々縷^①、藁しべなんぞ前壺^②に抱かせたとて、長持ちのすることではない。それぞれ、羽織の裾が地について泥になるはご存じないか。あれ傘が転がる、あれを畳んで立てかけておけばよいに。」といちいちもどかしう齒がゆくは思へども、「ここに切れがござんす、これでおすげなされ。」と呼びかくることもせず、これも立ち尽くして降る雨袖にわびしきを、厭ひもあへず小隠れてうかがひしが、さりとも知らぬ母の親、はるかに声をかけて、「火のし^③の火がおこりましたぞえ。この美登利さんは何を遊んでゐる、雨の降るに表へ出てのいたづらはなりませんぬ、またこの間のやうにかぜ引かうぞ。」と呼び立てられるに、「はい・今行きます。」と大きく言ひて、その声信如に聞こえしを恥づかしう、胸はわくわくと上気して、どうでも開けられぬ門の際に、さりとも見過ごしがたき難儀を、さまざまの思案尽くして、格子の間より手に持つ切れをもの言はず投げ出だせば、見ぬやうに見て知らず顔を信如の作るに、「ええ、いつものとほりの心根。」とやるせなき思ひを目に集めて、少し涙の恨み顔。「何を憎んでそのやうにつれなきそぶりは見せらるる。言ひたいことはこなたにあるを、あまりな人。」とこみ上ぐるほど思ひに迫れど、母親の呼び声しばしばなるをわびしく、せんかたなさにひと足ふた足、「ええ何ぞいの、末練くさい。思惑恥づかし。」と身を返して、かたかたと飛び石を伝ひゆくに、信如は今ぞ寂しう見返れば、紅入り友仙の雨にぬれて、紅葉の形のうるはしきが、我が足近く散りほひたる、そぞろにゆかしき思ひはあれども、手に取り上ぐることをもせず、むなしう眺めて憂き思ひあり。

① 婆々縷：こよりの下手なより方。

② 前壺：鼻緒を通すための下駄の前方にある穴。

③ 火のし：衣類のしわをとる金属製の器具。